

## コバルト短編小説新人賞もつ一步

『first love』

原稿用紙換算29枚

杉並らいむ 著

試着室のくすんだ茶色のカーテンを引き、大きな姿見の前に立つ、六月の花嫁。

薔薇のコサージュで縁取られた淡いピンク色のドレスはまるでお菓子のお城みたいだ。でも、彼女はそんなことにおかまいなしで、一人夢心地。

「何、その納得してそうにない顔は」

「そんなことないよ、似合う似合う」

彼女は目の前に並んでいるウエディングドレスを見比べて言う。

「やっぱり白の方がいいかしら」

鏡の前を何度もターンしながら、彼女は今着ているフリリのドレスの着心地を確かめる。あたしは思わず溜め息をつく。

「お姉ちゃん、まだ決まらないの?」

「だって真綾、人生で一度しか着ないものなのよ、ウエディングドレスなんて」

……いや、一生独身の人や、結婚式をしない人は絶対ウエディングドレスなんか人生で一度も着ないぞ。

そう言おうとして、やめる。今、彼女は幸せの絶頂にいるのだ。機嫌を悪くしてもあたしが困るだけだ。

「でも、水色も素敵ね。ね?」

目移りしている彼女はレースで縁取られた水色のドレスを手に取ってあたしに同意を求める。あたしは渋々頷く。

貸衣装ショップの店員さんも、苦笑してあたしたち姉妹を見つめる。すでに試着室を貸切り状態にして二時間が経過しようとしている。

優柔不断な姉の性格は昔からだ。それなのに、結婚を決めたのが早かったのはどういうことだろう?

あたしはまだ会ったことのない姉の婚約者を想像し、目の前で背中の中のホックが閉められないと慌てている彼女の滑稽な姿を見て、首を傾げる。

「お姉ちゃん……ホック閉まるわけないじゃん。サイズ違うんだから」

「うそお。なんで言ってくれないのよ」

「普通気づかない方がおかしいよ」

彼女は頬を膨らませる。渋谷別のドレスに着替え始める。ふんふんふん、と下手糞な鼻歌が響く。心底嬉しそうにしている姉が正直羨ましい。

自分も、将来ああなるのだろうか。沢山のドレスを試着して、悩んだ末に……

「決めたわ真綾！ あたし、これにする！」

シンプルな純白のウェディングドレスを選んだ、彼女のように。

ゴールデンウィーク最終日。春の陽射しは次第に強烈な夏のそれへと変わっていく。

姉、真織の結婚が決まったのは半年前のことだ。当時あたしはイギリスに短期留学していたので、その話を聞いたときは驚き呆れたものだ。

両親は口を揃えて言う、「真織みたいな娘に彼は勿体ないくらいだ」と。

今日は、その噂の婚約者が家に来る日。

あたしは着たくもなかったワンピースに身を包み、応接室で紅茶の準備をする。緊張のあまりトイレに駆け込む父。台所で自慢の料理を作っている母。自室のクローゼットの中で下着姿のままでうろろしている姉……また洋服に悩んでいるらしい。

「アールグレイにミルクって入れるっけ？」

「ミルクは別の容器に入れておけばいいわ。それより真綾、真織をどうにかして。早くしないと芳賀さんが来ちゃうわ」

姉は一人がぎりぎり入れるクローゼットの中にすりと入り、ぶら下がっている洋服を手にとって戻していく。

「お姉ちゃん。風邪引くよ」

「真綾あ、イチジュンに見せる洋服どれがいいと思うっ？」

いくら暖かいとはいえ、下着姿のまま一人で長時間動き回っていれば、風邪を引いてしまう。それなのに彼女はうるうると薄暗いクローゼットの中を彷徨っている。これで本当に二十一歳なのだろうかとあたしは不安になってしまった。

「そういうのは着替える前に決めるものでしょ」

「そうなんだけどさあ……」

横目に灰色のスーツを見る。彼女が毎日着ている女子大の制服。制服のある大学を敢えて選んだ姉は今でも私服選  
びが苦手だ。

「お姉ちゃん、いくらスーツが楽だからってくたびれた  
スーツ選ばないでよ」

「このブラウスは？」

「駄目。アイロンかけてないじゃん」

「そんなに目立たないと思っただけどなあ」

彼女はしわくちゃになったブラウスを諦めて片づける。

あたしは無造作に引出しを開いて、一番上に置かれていた  
ラヴェンダーカラーのアンサンブルを彼女に手渡す。

「とりあえず、その恰好じゃ外に出られないから着替える。  
いいね」

手早く着替えた彼女は今までの葛藤をけろりと忘れてし  
まっただらしい。

「そういえばこんなのもあったわね……これでいっか」

あたしはいつものこととわかりながらも、肩をすくめて  
彼女の部屋を後にする。

窓の外を見る。どこまでも続くアイボリーブルーの空。  
雲一つない快晴の日。

家へ近づいてくる黒い点。あれが、彼。

待ちきれなくなつて、彼女が扉を開けて飛び出していく。

彼が、彼女の身体を抱きしめている。まるで一枚の絵の  
ように、溶け込んだ景色。

「……妹さん？」

玄関で二人を見ていたあたしに気づいたらしく、彼があ  
たしの方へ笑顔を向ける。濡れ羽色の双眸が、あたしの姿  
を捉えている。彼の綺麗な瞳から、目が離せなくなる。

「はじめまして、兩宮真綾です。姉がお世話になってます」

口から零れたのは、堅苦しい挨拶の言葉。無邪気な姉の  
ようになれればいいのに。あたしは、ひきつった微笑で愛  
嬌を振りまくだけだ。

「はじめまして、真織の自慢の妹さんだね。僕は芳賀一純。  
よろしくね」

横で彼女が照れくさそうにしている。あたしのことを  
しっかりと妹とでも言ったのだろう。

彼はそっと左手を差し出す。あたしは握手に応えようと  
差し出された手に触れる。その瞬間、まるで導線に電気が  
流れたかのようにあたしの胸に激しく震えが走る。

……何、今の？  
手が離れてからも、あたしは瞬時に感じた淡い感情に戸惑いを感じていた。

あの日から、彼はちよくちよく我が家を訪ねるようになった。どうやら二人は結婚したらこの近所のマンションに新居を構えるらしく、二人で町の散策をしているらしい。「それでマオ姉、婚約者連れて町中を練り歩いてたわけか」「歩いてたのね……」

放課後、あたしは幼なじみであり同級生である辛島青磁と帰り道をのんびり歩く。

「婚約者の名前ってタガだっけワガだっけ」

「ハガだよ。下の名前はカズヨシ」

「イチジュンじゃなかったんだ」

青磁が納得して頷いているのを見て、もつともだとあたしも頷く。彼の名前を聞いて、彼女の呼び方があだなだったということを知ったのだから。

「一純って書くからお姉ちゃんはイチジュンって呼んでいいんだよ」

「僕が真綾をマーマって呼ぶみたいに？」

「そ、あたしが青磁をセージって呼ぶみたい」

そう言い返し、お互いの顔を見合わせて笑う。

「でもなあ、カツコイイよな」

「何が」

「学生結婚。両親の反対。愛を貫く二人……カツコイイじゃん」

青磁は将来脚本家になりたくて、しょっちゅう想像力をふんだんに働かせている。

そんな青磁にあたしは水をさす。

「……確かに学生結婚だけど。別に二人の愛を隔てる障害なんかなかったよ」

現に、驚いた両親も、彼と会って話をしているうちになちとけたというし、不安になっていたあたしも、彼と会って、この人なら大丈夫かなと思ったのだから。

「ちえ。つまんないの」

「つまんなくない。ただでさえ六月の結婚式に向けての準備がたくさんあって忙しいんだから」

「ジューン・ブライドかあ……女性と結婚生活の守護神ジュノーの月で、この月に結婚すると幸福になれるっていう……ロマンチックだなあ」

再び青磁の空想が始まる。放っておくと埒が明かないのであたしは遮るように言う。

「どうせ縁かつぎでしょ」

六月の花嫁は幸せになれる、なんて本当かどうかかわからないじゃない。思わず顔が強張る。それを見て青磁が苦笑する。

「なんかお前、僻んでるみたいだぞ」

「僻んでなんかいない」

顔が火照る。どうして赤くなる必要があるのかわからないのに。

「お子様には刺激が強すぎるんだよ」

「子供扱いしないでよ。同じ年のくせに」

中学三年生。そろそろ十五歳になる自分。

確かに、結婚なんて眼中にない年頃だ。あたしなんかまだ恋愛すら憧れなのだから。

「よく考えるとマーマヤとマオ姉は歳が六つ離れてたわけだな」

全然そんな風には見えなかったけど、と青磁は笑う。

「マオ姉はいつも子供みたいにはしゃいでたからな。それにマーマヤは大人っぽいから」

「なにそれ。あたしが老けてるってことじゃん」

「でも、自由奔放な姉としっかり者の妹、って言われてるだろ」

そう言われるとたじろいでしまう。しっかり者の妹はあたしの代名詞なのだから。

「あたしってそんなにしっかりしてるように見えるの？」

青磁の答えは、あたしが思ったとおりの言葉。

「さあな。僕は思わないけど」

どこか怒った顔で、つつけんどんに言う青磁が、あたしはとても好きだ。でも、それが恋愛感情なのかはわからない。

少なくとも、今は、まだ

人を好きになるってどんな気持ち？

あたしは、彼女に聞いたことがある。

彼女は暫く沈黙を置いてから、

「それはね……」

あの時、姉は何と言っただろう。小学生でまだガキだったあたしにとつて、たわいもない質問の一つだったのに、彼女は嘘偽りなく答えてくれた……

鍵で誰もいないであろう家の扉を開け、靴を脱ぐ。

「真綾ちゃん」

ぼんやり考え事をしているあたしの背後で響いたのは、聞き覚えのあるテノールの声。

「は、芳賀さん！」

「何驚いているの？」

不思議そうな顔をして、彼はあたしの顔を見下ろす。あたしは無言で首を横に振る。

「学校帰り？」

あたしは首を縦に振る。そういえばいつも一緒にいる彼女の姿が見当たらない。

「お姉ちゃんは？」

「学校。そろそろ帰ってくるみたいだけど」

彼はすでに我が家に溶け込んでいる。母は買い物に出掛けたらしく、図々しくも彼に留守番を頼んでいったらしい。

あたしは部屋に荷物を置いて、制服姿のまま、彼のいる居間へ向かう。

「一緒にいていい？」

「勿論。ここは真綾ちゃんの家なんだから」

それもそうだと思い、安心してソファに腰掛ける。

年上の人とふたりつきり。そう考えると緊張する。

あたしが緊張しているのを見て取ったのか彼は優しく話しはじめた。

彼女と、彼の出逢いからはじまり、そして……二人が選んだ、未来のお伽話を。

彼の言葉は、甘く、残酷だった。

二人の仲を嫉妬している自分が、確かにそこにいた。

あたしは、二人が一緒にいることに賛成した筈なのに、それなのに。

どうして、こんなに。

胸が痛むの？

「真織」

「ただいま。待ちくたびれちゃった？」

気づくと、彼の隣に自然と座り込んでいる彼女の姿。

「おかえり、お姉ちゃん」

あたしがそう言つと、今やっと気づいたかのように、彼女は振り返った。

彼女から向けられた冷めた視線は、あたしを怯ませ、拒絶の色を見せる。

あたしがここにいたということを、彼女は快く思っていない。

「真綾、いたんだ」

あたしは、無言で頷く。

そのまま立ち上がり、部屋を出る。

……なぜだか、泣きたくなった。

とぼとぼと、行くあてもなく、川べりを歩いてみると、橋の向こう側から学ラン姿の青磁が見えた。あたしが手招きすると、手を振りながら橋を渡ってきた。

「どうした？」

青磁は不貞腐れているあたしの前に立ち、顔を覗き込む。

「なんでもないよ」

あたしは顔を背け、突き放すように言う。それでも青磁はあたしの頭を掴んで、自分の目と視線を合わせる。呆れたような声。

「その顔はなんでもなくないだろ。目が潤んでるじゃないか。もしかして、マオ姉と喧嘩でもしたのか？」

「喧嘩の方がまだよかつたよ……」

青磁は桜の木の下のベンチにひよいと腰掛け、隣に座るように促す。あたしは首を縦に振ってその横に座る。

「そういえば、マーマとマオ姉が喧嘩してるところなんて見たことねえなあ」

あたしは黙って頷く。あたしと姉は歳の差が離れているからか、姉妹喧嘩をしたという経験がない。だから、姉があたしを拒絶したようなあの仕様に戸惑ってしまったのだ。あたしは青磁に先程の出来事を話し、自分が彼女らの結婚をどう思っているのかわからなくなってきたことを正直に伝える。

「……そう言われてもなあ」

あたしの感情的な発言に対して、青磁は眉を曇らす。黙り込んだ二人の背後で満開の薄紫のつつじが風に揺られている。

「マーマはどう思ってるの？」

「わからないから聞いているのに」

「でも、二人が幸せになればいいと思っっているんだろ？」

「……たぶん」

「なんだよたぶん、って」

どうしてか、青磁に怒られているような気分が陥ってしまふ。重たい溜め息をついて、あたしは口を開く。

「あたし、寂しいのかもしれない」

「寂しい？」

意外そうな青磁の顔。あたしは心の奥に埋もれていたその言葉を噛みしめてみる。

「もうすぐお姉ちゃんはお嫁に行っちゃうわけでしょ？  
そしたらもうあの家にお姉ちゃんはいないんだよ。それに、  
名字だって兩宮から芳賀に変わっちゃう。あたしとお姉  
ちゃんが他人になっちゃうんじゃないかって、すごく不安  
なんだ……」

「なんだか娘を思う父親みたいなこと言ってるな」

「茶化さないでよ。こっちは真面目に考えているんだから」

「悪い悪い。そっか、マーマは寂しかったのか……でも、  
本当にそれだけか？」

「え？」

一瞬、時間が止まる。

あの時、怒った顔をしていた青磁が、あたしを、あたしの押し殺していた心を、壊すような言葉を、  
続ける。

「お前、あの男が好きなんじゃねえの？」

再び、時間は止まる。

「何言ってるの、セー……」

「わかるんだよ」

遮られた。

あの男、って、芳賀さんのことだよね？どうして青磁が怒る必要があるの？ 一体何に怒ってるの？ わからないよ、青磁……

「どうしてそんなこと言うの？」

「やきもち」

数秒の沈黙。青磁の顔がほんのり赤い、ということばかり。

「セージって、お姉ちゃんのこと好きだったの！」

肯定なのか、否定なのかわからない青磁のだんまり。顔色は赤いまま。

「マーマ」



「何？」

「お前、話をずらしてるだろ」

「……でも」

あたしが反論しようとする、青磁が突き放すように言う。

「僕のことはどうだっていい！ ずっとお前を見てたからわかるんだよ。お前はアイツに恋い焦がれている。そうとしか思えない」

「勝手に決めないですよ。芳賀さんにはお姉ちゃんがいるじゃない。確かに芳賀さん大人だしカッコイイし憧れるよ。でもそれだけだもん…… たぶん」

「そのたぶんが問題」

「そうなの？」

「たぶん」

「……わかんないよ。余計わからなくなっちゃったよ」

「僕が言ったから余計混乱したみたいだな」

「たぶん」

「……何考えてるのかわかんねえぞ」

「別に考えてないもん…… 芳賀さんのことなんて」

「ほら考えてる」

青磁が両頬を風船のように膨らます。なんだか拗ねているみたいだ。あたしも青磁の真似をして、両頬を膨らます。そうしたら、やっと青磁は笑ってくれた。

南に位置していた太陽は、気づくと西へ大きく傾いている。何も知らない橙色の陽光が少しだけ憎らしく思える。

壁にかけられていたカレンダーをめくる。長かった五月も今日で終わり。明日から六月だ。そして今度の日曜日が結婚式。

「あたし制服でいいよね」

「準備する必要がなくていいわね」

母は上品な色留袖を取り出し、虫に食われていないか、汚れはないかを確認している。

結婚式を控え、我が家は慌ただしくなっている。初めて娘を嫁に出す両親は感傷的になっているし、姉は姉で勝手に今までの人生を振り返って「お嫁に行くのね」と感慨に耽っている。我が家で落ちついてるのはあたしだけだ。

「真綾」

「何？」

忙しくてここ数週間まともに会話をしていなかった姉が、  
あたしを手招きする。

あたしは彼女の後に続いて階段を上る。姉の部屋、  
扉の向こう。いかにも女の子らしかった桃色の部屋は、  
雑然としたダンボールの積まれた倉庫のようになっていた。  
荷物は明日、一足先に新居へ運ばれるのだ。

「……そっか。引越し」

「うん」

「寂しくなっちゃうね。お姉ちゃん、本当にお嫁に行っちゃ  
うんだ」

あたしはダンボールの山を見上げ、溜め息をつく。

「そんな湿っぽいこと言わないでよ。二度と会えないわけ  
じゃないんだし」

「ずるいよ」

「ずるい？」

「お姉ちゃんはずるい。あたしもお姉ちゃんになりたい」

「何言ってるの。あたしだって真綾になりたかったこと  
あったわよ。もっとしつかりしてたらなあ、って」

「その逆。お姉ちゃんみたいに自由奔放に生きて、本当に  
好きな人と結ばれたいって心底思っちゃったの」

「思っちゃったの？」

喧嘩になっても仕方ないと思って本音を言ったのに、彼  
女は笑っている。

「そう思うことはいいいことだよ。真綾はまだ若いんだから」  
そう言って、あたしに小さな箱を手渡す。

「イチジュンはあげない。でも、真綾にはこれをあげる」

「開けてもいい？」

「もう開けてるじゃない」

あたしはどきどきしながら小箱を開く。その中には、月  
をかたどった銀色のピアス。

「……きれい」

「真綾が、恋をしたらあげようって思ってたの。まさか、  
あたしの婚約者にときめいちゃうとは思ってもなかったけ  
ど。それだけ魅力的だったのかな？」

「……」

意地悪そうに彼女は笑う。あたしは恥ずかしさで身体が  
熱い。いつもならすぐに言える言い返す言葉も今は思いつ  
けない。

「でも、本当に好きな人に出会うまで、耳に穴を開けちゃ  
駄目だからね」

「何それ」

「お姉さんの命令」

そう言った彼女を見て、あたしは悟る。

あたしはお姉ちゃんに適わない、そして、それだからあたしはこんなにも惹かれてるし、大好きなんだ、と。

快晴。

制服姿のあたしと青磁。花屋の前で右往左往を繰り返した後、二人のおこずかいで白のウェディングドレスに似合いそうな白いリーガルリリーを買う。

最初、パステルカラーのライラックにしようかと思ったのだが、花屋のお姉さんが「ライラックはあんまりおめでたい花じゃないのよ」と言ったのでやめたのだ。

花束を作りながら、ライラックを身にした乙女は結婚指輪をすることができないという言い伝えを聞いて、納得する。これではお祝いの花束ではなく、いやがらせだ。

「ライラックの花言葉って、初恋って言うのよ」

初恋。

青磁とあたしはどちらからともなく顔を見合わせる。あたしたちの初恋は、互いに叶わぬままに終わるのだ。……たぶん。

花屋で時間をかけすぎてしまったからか、式の時間を過ぎてしまった。あたしと青磁は早足で教会へ向かって歩く。

「……マーヤ、勘違いしてない？」

「何？」

「僕がマオ姉を好きだっていつ言った？」

「まだ言っていないよ」

「言うわけないだろ。僕が好きなのは」

教会の鐘の音が響く。あたしは思わず駆け足になる。

「そんなのあとでいいよ！ 式が始まっちゃっ！」

「あとでいいって……おい、待てよ！」

気づくと、あたしの右手を青磁が掴んでいた。あたしが左腕に抱えている花束から甘い香りが漂う。周囲に百合の香りを運びながらあたしと青磁、走る。走る。

鐘の音。響く。響く。あたしの耳元に、心地よいハーモニ。ワーグナーでもメンデルスゾーンでもない結婚進行曲。

雲一つない空の下。花びらのシャワーが舞う。チャペルから出てきた新郎新婦は、照れくさそうに微笑みを交わす。

投げられた薔薇のブーケが弧を描きながらあたしの目の前を通過する。ブーケ？ ブーケの行方なんか関係ない。それよりもあたしは一刻も早く二人に伝えたいことがあるんだ。いつの間にか青磁とつないでいた手がほどけていた。それでもあたしは走っていた。息が止まるくらいに走って走って走って……

「お姉ちゃん！」

あたしが息を切らして走ってきたのを見て驚く人々。そんななか、穏やかな微笑みを浮かべて彼女は手を振る。

「今日はおめでとう！ お姉ちゃん、お兄さんっ！」

百合の花束を、彼に渡す。初めてお兄さんと呼ばれた彼は照れくさそうに、あたしの頭を撫でてくれた。

「お姉ちゃんを幸せにしないとあたし許さないからね！」

気分が高揚している。知らないうちに涙が頬を伝っている。それでも、涙を拭う気にはなれない。

「よく言ったな。マーマー」

震える肩を、青磁がぼんと叩く。あたしは泣き顔を見られないように顔を背ける。

「……セージ」

涙声で、彼の名前を言うのが精一杯。

「ご褒美」

「え？」

首筋に冷たい感触。思わず顔を向けると、芳しい薔薇の花束。

「マオ姉のブーケ。マーマーにどうしてもあげたかったから、手を放しちゃった」

つないでいた手のことを言っているのだろう。あたしは、薔薇のブーケを胸元に抱き寄せる。思ってもいなかったご褒美に、あたしは再び涙腺を潤ませる。自分の恋心にさえ気づけなかったあたしはあまりにも鈍感で、子供だった。少しは成長できたのだろうか？

黙ったまままでいたからか、青磁があたしの耳元で囁く。

「耳朶がくすぐりたい。」

「さっきの続き、言ってもいいか？」

花嫁と花婿に向けられている歓声が、その一時だけ、あたしたちのもののような、そんな錯覚に陥る。

あたしの答えを聞かずに彼は言葉を紡ぐ。焦らず、ゆっくりと。

「僕が本当に好きなのは」

fin.

---

『FIRST LOVE』杉並しほ 著

[sakka.org](http://sakka.org)